

大住隼人舞について

まず、「隼人舞」の起源は、日本書紀神代下巻海宮遊行の章第4別伝すなわち、海幸彦、山幸彦の物語の後半であります。この内容とは、山幸彦に海で溺れるところをたすけられたことにより、海幸彦が感謝の証として、湖に溺れる様をいろいろに演舞したものです。

この神話は、薩摩半島の西海岸吹上浜一帯(阿多、田布施、加世田)で生まれ鹿児島市坂元町催馬楽一帯に住む隼人一族が、国分鹿児島神宮や大隅の総神守公神社に奉納する神舞として、隼人舞を伝えていました。

そして今から1300年前、奈良朝時代到大隅隼人達は、九州からここ大住の地に移り住んだと言われ、「大住」の地名もそれに由来します。その頃前後8回にわたり、宮中での正月行事や祭り事の際に隼人舞が朝廷に奉納されました。

こうして九州で生まれた隼人舞は、隼人の大住移住によって朝賀舞として伝えられ後の雅楽の源流ともなりました。

「大住隼人舞」は、志賀剛先生の大住における隼人舞復元のご努力と、鹿児島県出身で隼人舞の継承者であった、牧山望先生の舞のご指導により、5人の地元の青年によって昭和46年10月15日に長らく途絶えていた隼人舞を、およそ500年ぶりに秋祭りの月読神社の境内において、復活させたものです。

その後、昭和50年12月には、この「隼人舞」が田辺町無形文化財第1号の指定を受けました。

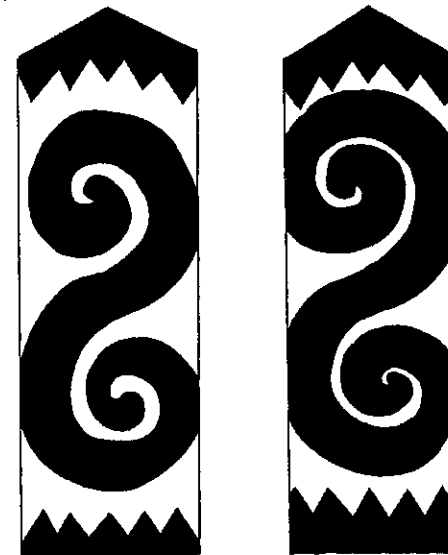
その後、昭和51年には大住隼人舞保存会が結成され、同年に中学生の舞人が誕生しました。以後3年ごとに交替し、代々中学生舞人によって今日まで受け継がれてきております。

大住隼人舞の奉納は、毎年10月14日の夜、月読神社(西八)と天津神社(岡村)で行われます。

平成29年度 大住隼人舞保存会総会

隼人の盾

奈良時代には、隼人がこの盾を持って正月儀式などに参加し、魔よけをした。盾の渦巻き模様は、敵の魂をひきとめる呪い。
また、この盾は、平城宮の井戸枠に盾を転用していたことが、平城宮発掘調査でわかった。



「延喜式」

隼人式に記す威儀用盾は「長五尺。広一尺八寸。厚一寸。縹二著馬髪一。以二赤白土墨一蓋二鈎形一」と規定されており、出土した盾はこの記載に一致する。板は絵。

大住隼人舞保存会では、平成3年に京都府郷土芸能保存振興事業補助金を受け、盾2枚を復元した。

京田辺市無形民俗文化財
大住隼人舞保存会